

---

# **天空のエトランゼ～脳髄の微笑み編～**

dig

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

天空のエトランゼ～脳髄の微笑み編～

### 【NNコード】

N8198X

### 【作者名】

ding

### 【あらすじ】

あの日、彼女は自殺した。

嬉しそうに、

楽しそうに……。

それが、すべての幕開きだった。

天空のエトランゼ

学園情報俱楽部編スタート！

## 呪われた序幕

夕陽が沈む。

まだ興奮をめぐらせず、ざわつく人混みの向こうで、救急車が正門を出ていく。

先程昇ったと思つたのに…。

輝は、夕陽の最後の輝きに目を細めた。

「チツ」

柄にもなく、高坂は舌打ちすると、逆光の中からやつと姿を目に現すことができたみじりのもとで、一步一步路上を踏み締めるよつこ、歩いていった。

「あっ、先輩…」

高坂に気づいた縁は、肩を一人の生徒に貸していた。

その生徒の名は、柳川梓。

今さつき、飛び降りた佐伯良子と同じ…演劇部の部員だった。

梓の顔は悪く、軽く嗚咽していた。

仕方があるまい。

親友の良子が、飛び降りるのを見てしまったのだから。

「すまない」

高坂は、由妃に頭を下げた。

「助けられなかつた」

情報俱楽部は、梓から、良子の様子がおかしいから、見張つてほしいと依頼を受けていたのだ。

しかし、情報俱楽部は守ることができなかつた。

「先輩…」

そんな高坂の姿に、縁も顔を伏せた。

「部長…」

自殺現場である屋上から降りてきた輝が、小走りで近づいてきた。

高坂はその声に気づかないのか、頭を下げたまま動かない。

息を切らしながら、輝が高坂の横に立つた。

「部長、どうします。これは予想外の展開ですよ。まさか、のつけから…飛び降り自殺なんて」

「自殺ではない！」

いきなり、高坂は頭を上げると、かつと皿を見開き、強い口調で否定した。

「彼女は、殺されたのだ」

「え！？一体、誰にですか！僕は近くから見てましたけど、彼女は自分から、飛び降りましたよ」

輝は目を丸くし、屋上を見上げた。

高坂はただ、そんな輝を睨むだけで、答えない。

「また、何の根拠もないんですか！」

少し呆れてしまつ輝。

「まつたく…」

大きくため息をつこつとした瞬間、沈黙を破るかのように、鋭い声が飛んだ。

全員の間に、考える為の沈黙が訪れる。

しかし、誰もその答えを得ることはできなかつた。

沈黙といつものが大嫌いな輝は、間を壊す為に、ぼりぼりと頭をかいた。

「しかし…人が死ぬつて時に、撮影ですか。新聞部つてやつは…つたく、どういう神経してるんだか…。あんたらは、人間ですか？果然どれるなんて、信じられませんよ」

ぎろりと、輝はさやかを睨んだ後、そばにいた縁の背中に隠れた。

さやかはそんな輝を、真正面に見据え、

「あたし達は、人間よ。だけど、起こつたことの真実を残しておくれ義務があるの。冷静に、沈着に、真実をとらえる義務がね」

さやかは、良子が飛び降りた校舎を見つめ、

「今回の自殺は、とてもおかしな臭いがした。確かに、彼女はとても上手く笑っていたわ。まるで、彼女自身が笑つていいようにねー。」  
さやかは再び、輝に視線を移し、

「だけど、あれは演技よ。とても臭い演技よ。自殺といつ名の演技。彼女は、誰かに操られていたのよ！何者かに、仕組まれてねー！」

さやかの悲痛な声が、彼女の心の内を示していた。

「影で、糸引く…誰かがいる」と。

みどりは、泣き続ける梓を抱き締めながら、呟いた。

「何者? フシ…者とは限らんがな」

高坂は、不気味に笑った。

そして、セヤカを見つめ、

「やつんだら…なぜなら? こにはブルーワールドだからな」

きこた。

セヤカは声こぼれで、肩をすくめて見せた。

「セヤカ…。これから、どうあるつもんなんだ」

「この映像を解析してみるつもつ。あまつ、気分がいいものではないけど」

「わかつてこる。明日の放課後までこは、分析を終わらせる。新聞部の第一室で、発表するから」

「了解した」

「わづか。多分、お前のかんは当たってこるだい。この件は、急を要するが」

高坂が頷くと、さやかは踵を返し、クラブ校舎の方へ消えていった。

「頼んだぞ」

いつのまにか、辺りは真っ暗になっていた。

高坂は、まだ泣いている梓の姿を心配そうに見つめると、拳を握り締めた。

## 加速

大月学園。防衛軍によつつくられたこの学園は、普通科以外に、戦士育成科などがある…所謂、軍事学校に近かつた。

東館、中央館、西館と言われる校舎を中心にして、グラウンドの向こうにクラブ校舎があつた。

今は、廃墟と化している特別校舎が北側にあり、西には、体育館と食堂があり、その裏には、図書館があつた。

ちなみに体育館の端から、図書館の角に、情報俱楽部の部室が地下にあつた。

事件の次の日。

高坂と緑の2人は、午後の授業が終わると、一目散にクラブ校舎に向かつた。

入り口から、真っ直ぐ廊下を突つ切ると、巨大な鉄の扉にぶつかる。

その扉の向こう側、難攻不落と言われる…大月学園新聞部の第二部室がある。

普段なら、銃弾も魔法も跳ね返す鋼鉄の扉も、今日は簡単に開いた。中に入ると、20畳くらいの部屋が広がっていた。

レトロ主義の部長の趣味か、奥には暗幕が下ろされていて、現像室がつくられていた。

それ以外…変わったところはない。

高坂は何もない部屋の右側の壁に近付くと、そこから三歩下がり、床を足でコンコンと叩いた。

すると、下からも同じようにコンコンと音がかえってきた。

びつやから、床の下は秘密の抜け穴になっているようだ。

今度は、タップダンスのようにリズムを刻むと、それが合図らいへ、床の一部がスライドし、階段が現れた。

「ひらり、ひらり」

階段から、一人の男が顔をだし、すぐに消えた。

「失敬」

高坂から、階段へと滑るように飛び込んだ。

階段といつよりも、梯子に近い。

2人は、それをつたって、下に降りて行った。

「あんまり、深くないんですね」

高坂の次に、降りた縁は、足元を確かめた。

一心、板が引いてあるようだ。

「行くぞ」

高坂は一步前に出ると、手のひらを前の空間に添え、ゆっくりと前に押した。

どうやら、扉があつたようだ。

闇から、日映い程の光で溢れた空間に、2人は目を細めながら入った。

中は、上の部屋の一倍くらいの広さがあった。

JのK間は、地下一階に相当する深さがあった。

そんな感じで、こんな場所をつくりたのは、ややかの仕業だった。

勿論、学校側には内緒である。

どこから電力を供給しているのは、明々とついている照明の下、ずらつと並んでいるパイプ椅子には、いろんなクラブの幹部達が、もう座っていた。

それも、ただのクラブだけではない。

高坂は、椅子の隙間を這うように進むと、一番前の席にどかっと腰を下ろした。

仕方なく、縁は遠回りをして、前に出ると、高坂の隣に座った。周囲は異様な…殺氣に似た空気が漂っていた。

照明の強さの為だけではなく、ムシムシした熱気が、すぐに肌をべとつかせた。

「それにしても、すごいですね。これだけの影の部長が集まるなんて…」

縁は、感嘆の声を上げた。

「まあな。影の部だけで、50くらいあるからな」

高坂は、軽く後ろを向くと、人々の顔を確認した。

「しかし…」

高坂はフツと笑うと、前を向いた。

「後ろのやつらより、今から来るやつの方が、怖いよ

突然、椅子に座る部長達に緊張が走った。

いつのまにか、高坂達の前に、1人の女が立っていたのだ。

すらっとした長身の女が、満面の笑みを浮かべながら。

その女の名は、如月さやか。

新聞部部長である。

「皆さん。今日集まつてもらつたのは、他でもありません。昨日起  
こつた自殺という名の殺人について、これから対策を考えて頂き  
たいからです。」

横五メートル、縦四メートルくらいのスクリーンのそばにあるプロ  
ジェクターの横に立つたさやかは、手にマイクを持ち、集まつた生  
徒達に向かつて話しかけていた。

「それでは

さやかが、続けて言おうとした瞬間、

「下りん!」

激しい音を立てて、パイプイスから1人の男が立ち上がつた。

「何がくだらないのですか？未確認生物愛好会部長

笑顔を向けながらも、さやかのこめかみが、ピクッと動いた。

未確認生物愛好会部長は、鼻で笑うと、

「自殺の一いつや一いつで、我々がなぜ集まらなくてならないのだ！」

少し声をあらげ、

「確かに、この世界で、人が自ら死ぬのは珍しい！しかしながら、そんなどこにでもいる女という生物が、死んだくらいで、なぜぎやぎや騒がなくともならんのだ！我々は、今、忙しいのだ！昨日やつと、新たな未確認生物の動画が送られてきたのを解読せねばならんのだ！や、やつは魔物ではなく、伝説の妖怪かもしれないのだあ！」

妙に興奮する部長。

「お、女が死んだくらいだとお」

さやかがキレて、変貌する前に、一番前にいた縁がかばっと、立ち上がると、未確認生物愛好会部長を指差した。

「てめえ！人が、一人死んだんだぞ！それを下らないだと…」

「そうだ。あいつらは、女の良さを知らない

ホスト俱楽部部長が、フツと笑った。

「彼女は殺されたんだぞ！」

縁が叫んだ。

「誰に殺されたといつんだ？」

未確認生物愛好会部長は、伊達眼鏡を人差し指で上げた。

「そ、それは…」

口の「もる縁を見て、勝ち誇ったように、未確認生物愛好会部長は言った。

「答えられる訳がない！彼女は自分の意思で、死んだかのだからな！それともなにかい？彼女は、誰かに操られて死んだとでもいうのかい！そんな非現実的な…」

未確認生物愛好会部長は、最後まで、言葉を発することはできなかつた。

さやかの手刀が、未確認生物愛好会部長の首筋に叩き込まれていたからだ。

「非現実的つて…じゃあ、あんたらの部は一体何なのよ」

そんな騒ぎの中でも、高坂だけは動じず、一枚の写真をじっと見つめていた。

「うーん

顎に手をあて、少し考え込んだ後、徐に興奮している縁の方を向いた。

「縁

しかし、縁は気付かない。

高坂は軽く肩をすくめると、制服の胸元からカードを取り出した。

「舞。すまないが、すぐに調べてほしいことができた」

「何ですか?」

カードから声がした。

「有無。自殺した佐伯良子の家の様子を…別に、家族を調べなくてもいい。家の表札を確認してほしいんだが」

「表札? それくらいでしたら、御安心用ですよ」

舞は情報俱楽部の部室の中にやっと笑うと、監視式神を移動させた。

「…縁

「何です!」

高坂はカードをポケットにしまつと、興奮をめぐらぬ縁の方を見た。

ぎりりと高坂を睨んだ縁は肩で息をし、目が血走っていた。

「な、何でもない。あとでいい」

縁の迫力に負けた高坂は、彼女が視線を外すと同時に、胸を撫で下ろした。

「やれ……やれ……」

高坂はまた、写真に目を落とした。

それは、演劇部の写真だった。

梓から、預かった写真。

そこに写っているのは、演劇部全員の集合写真。

高坂は、写真に目を細めた。

2ヶ月前の舞台発表後の打ち上げの様子が、写っていた。

そう写っていた。

「何見てるんですか？」

未確認生物愛好会部長との不毛な争いに疲れた縁が、席に座ると、

高坂の持つ『眞』を覗き込んだ。

「演劇部の『眞』じゃないですか。これが何か」

「…」

香坂はすぐ口に答えず、少し躊躇つてから、

「昨日と少し違つ」

と呟くやうに、呟いた。

「え？」

縁は、香坂の顔を見た。

「少しの差だが…」

「…それは、ほんの少しの違いだつた。

右端に写っている佐伯良子の足が、地面から浮いていたのだ。

地下にある会議室で、各俱楽部の代表者の話しあいが行われている時、輝は会議室から離れた体育館の近くの木陰に、身を潜めていた。なぜ、そんなことをしているのかと言つと…高坂の命で、柳川梓の護衛をしているのであつた。

今回の騒動で廃部になることが決定した演劇部だが、梓のような熱心な部員もいて、何とか部を継続させようとしていた。

体育館の角を使って、一人練習していたが、終わったらしく、奥で着替えをしているようだった。

あまりじろじろ見る訳にはいかないので、輝は木にもたれながら、時間を潰していた。

「遅いな…」

もう一-five分経つている。

いくらい句でもかかり過ぎではないのか。

輝は意を決して、木々の間から飛び出した瞬間、空を切り裂くような甲高い女の悲鳴が、聞こえた。

「柳川さん！」

輝は、走った。

着替え中でも関係ない。

体育館に飛び込むと、奥のロッカールームに走った。

「大丈夫！」

扉を開けた瞬間、輝は凍り付いた。

なぜなら、中にいたのは、梓ではなかつたからだ。

「さやああああ…」

まだ着替え途中の女は、いきなり扉を開けた輝に気付き、さつきよりも大きな悲鳴を上げた。

「え？」

輝の目が、点になつた。

輝は、單なる覗きになつてしまつところだつたが、悲鳴に気づいて、輝の後ろに来た梓が事情に気付き、慌てて扉を閉めた。

「あつ」「あつ

その後、何とか…輝のことを庇ってくれたから、捕まることはなかつたけど。

教室で着替えていた女の名は、伊集院優姫。

梓と同じ、演劇部の部員だ。

纖細そうで、壊れやすい…そんな感じがする女だった。

輝が、伊集院に平謝りしている時、高坂の持つ写真に、また変化が現れていた。

だけどすぐには、高坂も縁も気づかなかつた。

左端に写る伊集院の首筋に、二つの傷が出来ていたこと。

「何…？」

数分後、高坂は、写真の新たな変化に気付き、席を立つた。

「それでは、今から…昨日の事件の瞬間を」

それは、さやかが、映像を流そうとする時だった。

高坂は席を離れると、プロジェクターからの映像を遮った。

スクリーンに、高坂の影が映つた。

「高坂！」

さやかの怒声が、会議室に響いたが、それを無視して、スクリーンに背を向けると、高坂は走り出した。

「縁ーお前は見ておけ！」

再び、各部長が座っている席をかき分けて、高坂は来た道を戻る。途中、写真を取りだし、確認した。

「チツ」

高坂は扉を開けると、階段に手をかけた。

「輝ー！そいつから離れる！」

そんな高坂の声が、輝に届く訳がなかった。

「す、すいません！」

女子の着替えを覗いたという罪悪感が、必要以上に輝に頭を下げさせた。

「もう大丈夫だから、一応事故なんだし」

梓が、必死に庇つてくれたが、よっぽどショックだったのか…教室

の角で、伊集院は制服で体を隠したまま、震えていた。

その様子を見た梓は、土下座状態の輝に近づき、

「いじめんね。ちやんと説明しておくから」

外に出る間に促した。

「へ、うん」

輝は立ち上がると顎を、ふりふりと歩き出した。

「やあ…まあこよな」

頭から消えない伊集院の下着姿に、輝はため息をついた。

その時、またそれは響いた。

「きやああああ！」

また悲鳴が、ロッカールームから聞こえてきたのだ。

「えー！」

驚き、思わず足止め、振り向こうとしたが、先程のトラウマが、輝の足をふらつかせた。

すぐに走れない輝の上を、一陣の風が吹き抜けた。

その風は、扉を突き破り、輝の向こうに着地した。

「え？」

驚き、振り返った輝の目の前に、氣絶した梓を抱えた伊集院が立っていた。

「え？」

輝はその人間離れした跳躍力よりも、梓を抱える伊集院の下着姿に再び目を奪われた。

その為、さりに大事な部分を見落としてしまった。

「お、お、お、お」

声にならない声を上げる輝は、どうしたらいのかわからない。

そんな輝を見て、伊集院はフツと笑うと、再びジャンプし、体育館の屋根近くの窓ガラスを突き破ると、外に消えた。

「お、お、お」

まだ震えている輝を動かしたのは、バイブにしていたカードであつた。

胸ポケットにしまい、乳首に当たるよつておいたカードの刺激で、我に返った輝は、カードを取り出した。

「輝！無事か！柳川さんは、大丈夫か？」

高坂の声が聞こえてきたが、まだ輝の手は震えていた。

「いいか、輝！よく聞け！柳川さんと、同じ演劇部の伊集院優姫には、近づくなよ！理由は、まだ説明できないが…」

「む、無理です…」

やつと絞り出した輝の声は、震えていた。

「どうした！輝！何があつた！」

「む、む、無理です！近づくなんて、できません！」

輝は絶叫した。

「し、下着姿の女人に近づけません！」

「え」

高坂の言葉が、止まつた。

「ち、違つた！違つたんですよー、ビキニとはーすべてが、何もかもが！」

「…」

高坂は、無言になつた。

「もつ～どうでもいいです。さつきのまゝ、向ひつつから見せに来たんですからー犯罪ではないですよねー」

輝は興奮していた。

「ビバ！下着！」

と叫んだ瞬間、高坂は携帯を切り、指をこめかみに当てた。

「どうにかならんのか…あいつは」

頭を抱えてしまった高坂が、ため息をついた瞬間、影が頭上を通りすぎる気配を感じた。

「ー？」

咄嗟に、真上を見上げた高坂の目に、梓を小脇に抱えて、空を飛ぶ…下着姿の伊集院の姿が飛び込んできた。

「何ー？」

まるで、空中を走るように飛んでいく伊集院は、学園を囲むフェンスを飛び越え、外に消えた。

見えなくなる一瞬、伊集院は高坂を見た。

不敵に笑う唇の端から、鋭い牙が出ていた。

「へそ…」

高坂は、額に冷や汗が流れるのがわかつた。

## 見えないもの

「お姉様の為なら～えんやーいり」

鼻歌混じりでクラブ校舎を出たのは、新聞部部員矢島梨々香であった。

梨々香は、東校舎側にある自転車置き場に向つた。

そこに置いてある錆び付いた一台の自転車にまたがると、再びクラブ校舎に戻り、その裏にある隠し門から外に出た。

基本的に、この学園は全寮制であるが、一部近くに家がある者は、自宅から通うことが、許されていた。

佐伯良子もその一人だった。

地図を片手に四苦八苦して、やっと辿り着いた佐伯の自宅の表札を見て、梨々香は愕然とした。

「え？」

表札に…良子の名前がない。

子供の名前はのせないのかとも思つたが、弟と妹の名前は、ちゃんとあつた。

梨々香は周りを見回すと、一件の煙草屋を見つけた。

お婆さんが一人でやつている小さな店の前に自転車を停めると、梨々香はカウンターに近づいた。

「おばばちゃん、煙草一ひとつをこな」

「ここに」と笑顔を浮かべながら注文した梨々香を、お婆さんはぎろりと睨み、

「あんた、未成年じやろ」

「ただのお使いですよ。父親から頼まれまして。無理だと言つたんですけども～はあ～」

白々しくため息をつや、肩を落とす梨々香を見て、もともと気が優しい人なのか…お婆さんは、さつと辺りを伺いながら、煙草を差し出した。

「今回だけだからね。あなたの顔一覚えておくからね

「ありがとう。素敵なお姉さん」

また白々しく言つて、梨々香は笑顔でお金を渡した。

「とにかく、綺麗なお姉さん。さきたじ」とが、あるだけビ。この近くにある佐伯さんちって、あるでしょ?」

「ああ、よく煙草を貰つてくれるよ」

「あたし…」

梨々香は身を乗りだし、

「そこの娘さんと同級生なんですよ。ほら、佐伯良子さん…彼女とはクラスが違うんですけど、かわいい人ですよね。同じ女なんだけど、憧れるなあ」

手を組み、少し空を見上げながらも、梨々香はお婆さんの反応を見ていた。

梨々香の言葉に、お婆さんは首を傾げた。

「佐伯…良子？ 佐伯良子…」

少し考へ込んだ後、お婆さんはまた手を叩いた。

「ああ…」

「知つてます…やっぱり、かわいいですよね。おば…お姉さんもそう思つでしょ？」

思わず、言ひ間違いかけた梨々香に気づかずに、お婆さんは言葉を続けた。

「佐伯真子ちゃんのことだね。今年、高校受験だって、奥さんが言ったわ。志望校が、ここから遠いから、大変だつて言つてた、言つてた」

「佐伯真子…」

梨々香は、やつを確認した表札を思いだし、

「妹さん？ち、違いますーその子のお姉さんー。」

「はい…お姉さんなんでしたかな？」

お婆さんは、考え込んだ。

(ボケてんのかよ)

心の中で毒づいたが、口に出すことはない。

梨々香はさりに笑顔をつくつ、

「せひーー！」の近くの大月学園に通う女の子ですよ」

「大月学園？」

お婆さんは首を捻った。

「近くにあるでしょ」

梨々香は、場所まで説明しだしたが、お婆さんはただ…眉を寄せ、首を傾げるだけだった。

「お婆ちゃん」

「ここにお婆ちゃんと言つた梨々香は、学園の方を指差した。

「おーからでも見えるでしょー校舎が」

梨々香が指差す方に、田をやつたお婆さんは、一応眼鏡をかけ、確認した。そして、大きく息を吐き、

「何言つてんだい。大きなマンションが建つてるだけじゃないかい。どこの、学校があるのさ」

「え？」

梨々香は自分が指差した方を、凝視した。

自分が今までいた大月学園が……なんとか見えた。

まるで、蜃氣楼のよつて搖らめきながら。

そして、お婆さんが言ったマンションの姿が、それに重なり……時折、学園よりもはつきりと存在を誇示する」とがあった。

「何じやーりああー！」

思わず、煙草を握り潰し、梨々香は頭を抱えた。

そう……眞の事件が始まつたのだ。

「チツ」

高坂は、伊集院が飛び去った旧校舎の方へ走りながら、カードを手にした。

「舞！聞こえるかー佐伯さんの家を探るのよ、後回しにしてくれー。」

高坂はカードを、耳に当てるとい

「直ちに、上空から見た学園全体の映像を、一いつひり流せー。」

指示を飛ばした。

「部長。監視衛星は、一つではありますよ。学校から半径3キロなら、あたしが作ったみるみるくんが、カバーしてくれます」

情報俱楽部の部室の中で、布団にくるまれながら、パソコンのマウスを忙しく動かし、舞はにやつと笑った。

「みるみるくんー！GOー！」

監視式神からの映像をライブでとらえた舞は顔を寄せ、気になる部分をクリックした。

ディスプレイに映つたのは、ぐつたりとした女生徒が、何かに釣られたように、体育館の上を飛び越えていく様子だった。

その動きは速く…一瞬しかとらえられなかつた。

「部長…。今のは何ですか？トリック体験学習部のパフォーマンスですか？」

「違う！」

カードから、その様子を見ていた高坂は、伊集院が消えた方向を確認していた。

「舞！お前は、今の映像を分析しろ！映像は1人だが、目視では2人いる」

「どういう意味ですか？」

舞は一応記録した映像を呼び出すと早速、カーソルを女生徒に持つていった。

しかし、何度も調べても、そこからは何も見つかなかつた。

「彼女達が消えた方向は！」

高坂はカードをしまつと、体育館から東校舎横を走り抜け、特別校舎を通り過ぎると、裏門を抜けた。そして、道を挟んで立つ…もう一つの校舎を見つめた。

「旧校舎」

旧校舎。普通科しかなかつた時代…学園はもともと、そこにあつた。

今の中学校の場所には、理事長である黒谷の家と、祠があつた。

しかし、祠は地下に隠され、新しい学園が建てられたのだ。

それは、何年も前の話であり、祠があつたことを古くから周りに住む人達も、知らないくらいであった。

存在を消すようにしながら、なぜ…旧校舎だけは取り壊さなかつたのか…。

「バグ校舎か」

高坂は、裏門と旧校舎の間で立ち止まつた。

高坂がこの世界に來た時、旧校舎はなく、そこは空き地であつた。

しかし、祠に封印されていた女神ムジカが復活し、討伐された後、突如として旧校舎は現れたのである。

舞が、防衛軍の極秘ファイルにアクセスし、調べたところ…祠を地下に移動する為に、なにがしらの人柱的な力を使つたと書かれてあつた。

その力を使つた場所こそが、旧校舎らしいのである。

(人柱？あそこにいた誰かか？それとも…)

実世界から來た高坂には、この辺りの伝承は謎が多すぎた。

(いくか)

高坂はカードを取りだし、旧校舎上空からの映像を見たが、映つてはいない。

結界を張つてゐるからであつた。

「映らないか」

高坂は、フツと笑つと歩き出した。

「部長！」

カードから、舞の声がした。

「入れるんですか？」

「ああ……」

高坂は頷いた。

すると、カードに手書きの旧校舎の見取り図が転送されていた。

「お気をつけで」

舞の言葉に、高坂は大きく頷いた。

「ああ」

旧校舎は、このような形をしており、真ん中はグラウンドになつていた。

校舎全体は、倒壊を警戒してか、金網のフェンスで補強されていた。

そんな建物だから、生徒の殆どは近づく」ではない。

いや…近づけなかつた。

なぜならば、旧校舎が見えるのは…ほんの数人だつたからだ。

歩き出した高坂の後ろ姿を、裏門にもたれて見送るものがいた。

情報俱楽部顧問、前田絵里香であった。

「見えない。触れない。近付けないものを、注意はできないからな

前田は煙草を吸いながら、目を細めた。

彼女には、旧校舎が見えてなかつたのだ。

カードをかざし、魔力を発動させても、反応がない。

「教師なら止めるべきだが…」

カードのディスプレイに映つていた高坂が消えた。

「情報俱楽部顧問としては、行かすしかないな」

前田は煙草をくわえると、腕を組み、高坂の帰りを待つことにした。



## 一人ヶ原

江戸から、明治に向かう混乱の時代。

大層な金持ちの屋敷に、1人の少女がいた。

少女は、この屋敷の主人の娘であつたが、正妻の子供ではなかつた。所謂、隠し子であつたが、10歳の誕生日を迎えたある日、突然屋敷の主人の使いの者達が来て、少女を産みの母親のもとから引き裂いた。

跡取りが産まれなかつた故に、少女を引き取りに来たのだ。

いや、引き取るとは違うかもしれない。

幕府から、維新政府に変わる動きの中で、父親である主人は、維新政府と繋がりを持つために、少女を…とある役人との間に、婚約という形で捧げることを決めたのだ。

母親から引き離され、しばらく泣くだけの日々だった少女は、ある日から泣くことをやめた。

その代わり、よく笑うようになったのだ。

それも、夜中に。

深夜になると、少女の部屋から漏れる笑い声を、気持ち悪がり、もつとも恐れたのは、正妻でした。

もともと、少女の存在を快く思つていなかつた正妻は、ある夜… 手伝いの1人に、少女の部屋を覗きに行かせました。

恐る恐る… 障子に影が映らないように、少女の部屋の中を覗いたお手伝いは、息を飲みました。

部屋の中には、少女しかおらず、それも布団に入らずに、真ん中で正座をし、樂し氣に笑う少女がいただけでした。

その報告を受けた正妻は、首を捻りました。

それからも、深夜… 少女の笑い声は止まることはありませんでした。

それからまた、時は過ぎた… ある日。

酒に酔つた屋敷の主人が夜中に、偉く上機嫌で帰つてきました。

屋敷の者に土産を振る舞つた後、主人の耳にいつもの如く、笑い声が飛び込んで来ました。

酔っぱらいつてやつは、わかりません。

途端に機嫌が悪くなり、主人は少女の部屋に向かうと、障子を開け、中に入りました。

その瞬間、少女は笑みを拭い、主人の方に顔を向けました。

その日は、自分の父親を見る日ではありませんでした。

まるで、親の敵を見るが如く。

そして、少女の目を見た父親は見たのだ。

化け物を。

恐ろしい化け物を。

それは、血塗れの獣の体に、父親である自分の顔がのつっていたのだ。  
自分の顔をした化け物。

金と権力にまみれた化け物。

主人の酔いは一気にさめると、部屋から飛び出し、どこからか刀を持つてくると、再び少女の部屋に行き、

「化け物め！」

自分の顔をした化け物を斬った。

しかし、話はそれで終わらない。

主人は気が狂つたように、屋敷にいた妻も、お手伝いも…すべての人間を斬り殺した。

そして、最後に、自分の首をかき斬って、死んだ。

「それが、1人ケ原といつ話だそうです」

後ろに控えるユウリとアイリの話を聞き終えて、リンネは荒れ地に立ちながら微笑んだ。

「そう」

「チツ」

軽く舌打ちすると、高坂は旧校舎の下駄箱が並ぶ玄関を突っ切り、校舎の一番裏に足を踏み入れた。

まるで刑務所のような高い塀があり、その前に、それはあった。

なぜ、そこに来たのか… 高坂にもわからなかつた。

「その屋敷は、ここにあつたらしいです」

「そう」

リンネは、振り返った。

真後ろには、大月学園があつた。

1人ヶ原の屋敷は、ちょうど旧校舎の辺りにあつたらしい。

そして、その時死んだ少女の墓と言われる祠が、旧校舎の裏にあると言っていた。

他の屋敷の者は、他の場所に葬られたが、少女の死体だけは、屋敷から動かせなかつたといつ。

屋敷は焼かれたが、少女が死体は燃えずに、氣味悪がつた人々がそのまま、土を被せ、墓としたのだ。

だから、今も…祠の下を掘れば、少女の死体が出てくると言われている。

まったく変わらない姿で。

そんな迷信を信じる気にはなれなかつたが、この学園には、そんな話が多い。

新たに校舎を作つた時も、土の中から、変なケースが出てきたし。

それを、科学信仰部がエックス線を当てて、分析したら、少なくとも平安時代のものだとわかつた。

そのケースは、実世界の新聞部のどこかに保管されているはずだ。

「…つたく、それにしても、こんな氣味悪い祠がある場所に、学校をつくるか？」

高坂は、盛り上がった土に、ちょこんと鎮めのお地蔵さんを置いただけの1人ヶ原の祠の前に立つた。

旧校舎の裏には、祠以外なく、2人が隠れる場所はない。

「やはり…校舎の中か？」

一応、見落としてるところがないが、調べようと祠に近づいた時、高坂の携帯が鳴った。

「携帯？」

鳴るはずがないものだった。

実世界からたまたま持ち帰つたものであつたが、ブルーワールドでは無用の長物であった。

その携帯が鳴つた。

それも、死んだ兄の番号で。

「はい」

高坂は氣を引き締めると、電話に出た。

兄の携帯を持っていると考えられるのは、一人しか思い浮かばなかつた。

いや、一人と言つていいのか。

電話の向こうで、かけてきた主は無言で微笑んだ後、間を開けて話し出した。

「あなたなら、出ると思ったわ」

「き、騎士団長リンネ！」

電話の主は、炎の騎士団長…魔神リンネであった。

「簡潔に言つわね。いい女に暇はないのよ」

と自分で言つて、フフフと笑つた後、リンネは言葉を続けた。

「最近、じぢらの世界で、人間の夢がなくなっているの

「はあ？」

唐突な話に、高坂は眉を寄せた。

「その後、人もいなくなる」

「何の話をしている？」

「知つてるかしら？学園の裏に、一人ヶ原と言われる心霊スポット

がある」とを、昔、屋敷があつて、「

「何を言つてゐる？学園の裏は、旧校舎で、その前は黒谷の邸宅だ」

思わず、自分の話を遮った高坂に、リンネは笑つた後に、ゆっくりと皿を細めた。

「思つていたより、頭が悪いわね。こゝとあなたがいる世界は違つわ。例え、裏表でもね」

「…」

リンネの言葉に、高坂は目を見開いた。

「失踪した人間達は、学園の近くで消えている

「な」

「言いたいことは、それだけよ」

電話を切らうとするリンネに、高坂は慌てた。

「ま、待て！」

しかし、携帯を耳元から離し、切らうとした時、思い返したようだ、リンネは再び携帯を耳元に当てた。

「言ひ忘れていたわ。彼の携帯…着信はたくさんあるのに、アドレスは2件しかないわ。あなたと…妹さんかしら」

最後にそれだけ言つと、リンネは携帯を切つた。

## 「リンネ様」

後ろでずっと控えていたユウリが、口を開いた。

「なぜ、人間にそのようなことを」

ユウリの質問に、リンネは肩をすくめ、

「意味はないわ」

携帯をしまった。

「人間の悪霊如き。我々の炎ならば」

アイリは頭を下げながら、地面を睨んだ。

「教えると助けるは、違うわ」

リンネは、歩き出した。

「それに、人には強くなつて貰わないと、困るから」

そして、クスッと笑うと煙のようにその場から消えた。

ユウリとアイリも、頭を下げたまま、消えた。

その2分後、相原理香子と月影のメンバーが来たが、リンネ達を目にすることができなかった。

「最近、学園の周りで失踪事件が多いわ。パトロールを強化しましたよ」「う

理香子の言葉に、月影のメンバーは頷き、それぞれに分散して行つた。

「向こうの世界とつながる携帯…。失踪者。夢…」

祠の前で、顎に手を当てて考える高坂。

「夢か…。そういえば昔、なりたいものがあつたな」

その時、後ろで草を踏みしめる音がした。

無意識に振り返った高坂は、5メートル向こうに立つ者を見て頷いた。

「もうもうーこれだーでも、こいつじゃない。これは、見た瞬間、泣いてしまつたな」

しみじみと昔を思い出していた高坂は、途中ではつとした。

「どうしてー仮面 イダー ンが、いるんだー」

バッタに似たグロイ生物がいること、高坂は絶句した。

しかし、驚いている暇はなかつた。

そのバッタに似たグロイ生物は、突然飛び上ると、空中からの蹴りで、高坂に飛びかかってきた。

「あり得ん！」

高坂は逃げることをせずに、前に低く飛ぶと前転した。

高坂の頭上を蹴りの体勢のグロイ生物が、飛び越えていく。

「どうなつているー」

高坂は急いで立ち上がり、振り返った。

「高坂くん。席について」

また後ろから声がしたので、振り返ると…高坂の隣で、教壇の後ろに立つ教師の姿が飛び込んできた。

そして、周囲には…クラスメートがいた。

「…」

状況判断しようと、周囲を確認する高坂に、教師は笑顔で言った

「よつひや、当学園へ」

にこにこ笑う教師に、意識が言ってしまい… 高坂はすぐに気づかなかつた。

クラスの全員が笑っていることに。

(チツ)

心の中で舌打ちしながら、高坂は机に座り、頬杖をついていた。

周りにいる見知らぬ生徒達。

制服はばらばらで、人種もばらばらであった。

なのに、言葉は通じていた。

人間の言葉は、单一であるブルーワールドにいるから氣にしていかつたが…明らかに、実世界の中国語や英語を話している者もいるのに、頭に入つてくるのだ。

(ある種の魔法か？脳波や波長、もしくは思考を分析して解析する。いや、わからん。舞とつながれば）

高坂は席を立つと、カードを確認した。通信はつながらない。

少し歩き、教室の窓のそばにいくと、一応携帯を開いた。

「オウ！高坂くんは、携帯をお持ちなんですね。ということは、僕と同じ世界から來たんですねえ」

後ろから声をかけられ、高坂は少し眉を寄せた後に、振り返った。

180センチはあるひょろ長の白人が、立っていた。

着ているのは制服ではなく、世界征服と漢字でプリントされているTシャツであった。

「しかし、この世界で、携帯はナンセンスねーなぜなら、…」

世界征服は、ここで言葉を溜めた後、

「携帯会社がないからよお～」

と言い、両手を広げた。

「…」

高坂は携帯をしまつと、前を向いた。

窓から見えるのは、日本の住宅街だ。

「オウ！ 高坂！」

世界征服は高坂の隣に来ると、窓を開け放ち、

「あなたには、何が見えますか！ 僕には、学園の外がすべて、アキバに見えます！ うー オウ！ ワンダフル！」

世界征服の言葉に、高坂は目を見開いた。

「何？」

そして、世界征服の横顔を見ようとした。

その時、教室の扉が開いた。

「ビバ！下着！ビバ！天国！僕はとつとつたどり着いたのですね」  
そして、扉の前で涙を流しながら、敬礼する輝の姿が、目に飛び込んできた。

「下着姿の女性ばかり！世の中、軽装だ！いつのこと、もう一枚  
くらべー。」

エロイ顔で、教室を見回す輝に向かって、高坂は歩き出した。

「！」これはこれは！ナイスバディのお嬢さん！

近付いてくる高坂の胸と下を交互に見る輝。

「高坂パンチ！」

そんな輝の顔面に、高坂は拳を叩き込んだ。

「見れた！た、谷間！」

満足気に後ろに倒れる輝は、後頭部を廊下にぶつけると、はっと田  
を覚めた。

「ふ、部長！？」

田の前に立つ高坂を認識した輝は、一応下から上まで確認してから、  
こう言った。

「ま、まさか！女装の趣味がおもひで」

「「うぬせー」

高坂は倒れている輝の腹に足を乗せると、教室の外に出た。

「ボーアイ、大丈夫かい？」

世界征服は輝の前に来ると、手を差し伸べた。

「部長ー！」

輝は無視して立ち上がり、高坂の背中を追つて走り出した。

「オウ！ノオ～」

肩をすくめる世界征服。

「部長ー！」

「…」

後ろから輝が叫んでも、高坂は足を止めない。

「どうしてくれんですか！部長に殴られてから、下着の天使達がいなくなつたじゃないですか！」

輝は目だけを動かし、周りを確認し、拳を握り締めた。

「桃源郷が消えた」

そして、下を向くと、思い切り…肩を落とした。

「ふ、部長のせいだ！」

抗議しようとした輝を上げた瞬間、輝は高坂の背中にぶつかった。

「な！」

思わず絶句した高坂が、足を止めたからだ。

「部長？」

輝はよろめきながらも、前を見た。

笑顔で談笑しながら、高坂達の横を通り過ぎていく…大月学園の制服を着た女生徒達。

「さ、佐伯良子！？」

輝は思わず、目で女生徒達の動きを追った。

「あり得ん！彼女は！」

高坂が振り向こうとした瞬間、前から声がした。

「お兄ちゃん」

その声が、耳に飛び込んできただけで、高坂の息が止まり、心臓も止まりそうになった。

「ば、馬鹿な……」

何とか絞り出した言葉は、状況を認めはていなかつた。

「お兄ちゃん」

一度目の呼び方で、高坂は震えながら、前を向いた。

「こくら、父さんと母さんが離婚して、別々になつたからといって、お兄ちゃんはお兄ちゃんなんだからね」

「り、涼子」

膨れ顔の女の子を認識すると、高坂の左目から一筋の涙が流れた。

「真お兄ちゃんも、流お兄ちゃんも、ずっとわたしのお兄ちゃんだからね」

それだけ言つと、涼子は高坂から離れ、手を振りながら廊下の角を曲がつた。

「部長の妹さんですか？ 可愛いですね。あまり部長と似ていないです。よかつた」

「涼子」

輝の話は、高坂の耳に入つてこなかつた。

同級生達の手によつて、植物人間となつた涼子は…兄である幾多流の手によつて、延命装置を取られ、亡くなつた。

原因をつくつた生徒は、幾多によつて殺された。

「あり得ん」

と呴きながらも、高坂は涙を拭わなかつた。

「あり得ない」

その言葉だけを何度も、呴いた。

「そ～う～あり得ない世界ね」

世界征服は、深々と頷いた。

「だけど～あり得ないから、失いたくない世界よ。こ～は」

教材を手に、廊下を歩く女教師は、微笑んだ。

「あなたは、逃げれない」

女教師は、ひらりと廊下の窓から下を見た。

校舎と校舎の間に、祠が祀つてあつた。

「(一)はもう… 一人ケ原ではないわ」

女教師は、口元を緩めた。

その頃、裏門にもたれて、煙草をふかしていた前田の前に、2人の生徒が近付いて来た。

「来たか」

前田は、煙草を携帯灰皿にねじ込んだ。

「(一)に、校舎があるなんて… 知りませんでした」

「すまないな。あたしには、見えないんだ」

前田は、軽く右肩をすくめてから、2人の生徒を見た。

「(一)とは、お前には見えるんだな? 生徒会長」

近付いてきたのは、九鬼真弓とさやかであった。

「何とかですけど」

九鬼は、朧氣に見える旧校舎を見上げた。

「先生。一応、各俱楽部に問題提議だけをしましたけど」

さやかは、新聞部顧問でもある前田を見た。

「「」苦勞さん」

前田は、見えない旧校舎を見上げ、

「認識さえさせれば、見えるかもしれない。」」いつがな」

目を細めた。

「行きます」

2人を置いて、九鬼は歩き出した。

旧校舎に向かつて。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8198x/>

天空のエトランゼ～脳髄の微笑み編～

2011年11月20日11時31分発行